

近代の国づくり（1867～1900） その7

《川崎市幸区、聖蹟桜ヶ丘の由来》

明治天皇の御幸は、多摩川流域において地名や地図に記憶されています。

川崎市に幸区がありますが、それは明治天皇「御幸」の「幸」から付けられたものです。（注1）現在、その御幸場所は、川崎市立御幸公園となっています。

御幸の5年後に、「町村制」が施行され、御幸村が誕生します。この御幸村こそ、多摩川流域において近代工業、近代治水のスタート地点となるのです。

また、京王線に聖蹟桜ヶ丘駅がありますが、「聖蹟」とは、明治天皇が、何度も兎狩や鮎漁で御幸されたことから付けられたものです。現在、御幸の拠点となった地は、都立桜ヶ丘公園となり、そこに旧多摩聖蹟記念館（1930年（昭和5）建造）があります。

なお、多摩川での鮎漁は、長良川の鵜飼と違って、舟上から鵜を操るのではなく、徒歩鵜飼といって歩きながら鵜を操るのが特徴です。

さらに、小平市に御幸町がありますが、これは、玉川上水の土手に植えられた桜（注2）を觀にこられたことから付けられた名前です。大田区には、聖蹟蒲田梅屋敷公園がありますが、これは、明治天皇が9回も梅屋敷に御幸された地です。

注1：川崎市は、1924年（大正13）、水道を共有することが縁で、御幸村と川崎町と大師町が合併してスタートし、そのとき御幸村は「幸区」となりました。

注2：江戸の享保時代、玉川上水を農業用水として利用し新田開発が行われますが、新田地域を活性化するために、川崎平右衛門が桜を玉川上水の土手に植栽します。昔は、小金井桜として有名でした。

写真は、①明治天皇臨幸御觀梅跡（細見撮影）、②旧多摩聖蹟記念館（細見撮影）、③玉川上水小金井桜觀桜記念碑（細見撮影）

①



②



③

